

巻頭言―最後のサバティカル

二〇二〇年に還暦を迎えるにあたり年賀状を「卒業」して以来、年末年始の書きものはこの巻頭言と新書大賞投票になっている。新書大賞は昨年度に刊行された新書中のベスト5を選ぶものだから「回顧」であり、四月刊行の巻頭言は「展望」ということだろう。

この二〇二三年度、私は前期にサバティカル（研究専念期間）を取得し、これまでの研究をまとめる機会にしたいと考えている。サバティカルは旧約聖書の安息日（六日間働いた後の七日目）を意味するラテン語 sabbaticus に由来するので、原義は「休暇」である。

佐藤 卓己

もちろん、日頃まとまった研究時間を確保できない大学教員の場合、この「休暇」こそ研究に専念できるチャンスである。むろん、ゼミナリストに博士論文を順調に仕上げてもらうために、この前期も夏休み同様に「博士論文定期検診」は続ける予定である。

今後サバティカルを申請する方々のご参考のために、私が二〇二二年七月に研究科長に提出した「特別研究期間」申請書類の内容をここに公開しておきたい。

* * *

研究テーマ 近代日本における「メディア議員」――

『教育―メディア―権力』の視点

〔研究計画〕『教育―メディア―権力』の三者関係から

「政治のメディア化」の日本の特質を構造的に解明する共同研究の成果として、佐藤卓己編『近代日本メディア議員列伝』全二五巻（創元社・二〇二三年六月から二〇二六年一月）を刊行する。佐藤個人にとつてはゼミOB・OGを中心に執筆する佐藤の京都大学退職記念事業の一環であり、第一巻の執筆作業とシリーズ全体の監修を集中的に行う。各年の刊行計画は以下の通りである。

二〇二三年の六月に佐藤卓己『池崎忠孝の明暗―教養主義者の大衆政治』（東京帝大↓萬朝報↓護国同志会）、同八月に井上義和『降旗元太郎の理想―名望家政治から大衆政治へ』（東京専門学校↓信濃日報↓憲政党）、同十一月に白戸健一郎『中野正剛の民権―狂政政治家の矜持』（早稲田大↓東京朝日新聞↓国民同盟）を刊行する。

二〇二四年の一月に赤上裕幸『三木武吉の裏表―輿論指導か世論喚起か』（東京専門学校↓報知新聞↓憲政会）、同二月に河崎吉紀『関和知の出世―政論記者からメディア議員へ』（東京専門学校↓新総房↓憲政会）、同五月に松尾理也『橋本登美三郎の協同―保守が夢見た情報社会』（早稲田大学↓東京朝日↓自民党）、七月に福岡良明『西岡竹次郎の雄弁―苦学経験と「平等」の逆説』（早稲田大学↓長崎民友↓政友会）、九月に山口仁『田川誠一の挑戦―保守リベラル再生の道』（慶應義塾大学↓朝日新聞↓新自由クラブ）、同十一月に佐藤彰宣『石山賢吉の決算―ダイヤモンドの政治はあるか』（慶應義塾商業学校↓実業之世界↓民主党）を刊行する。

二〇二五年の一月に松永智子『米原昶の革命―不実な政治か貞淑なメディアか』（一高↓赤旗↓共産党）、三月に石田あゆ『神近市子の猛進―婦人運動家の隘路』（津田英学塾↓東京日日↓日本社会党）、五月に長崎励朗『上田哲の歌声―Why not protest?』（京都大学↓日本放送協会↓社会党）、七月に片山慶隆『大石正巳の奮

闘―自由民権から政党政治へ』(三菱商業学校↓自由新聞↓憲政党、九月に戸松幸一『古島一雄の布石―明治の俠客、昭和の黒幕』(共立学校↓「新聞」日本↓政友会)、一月に河崎吉紀編『近代メディア議員人名辞典・付録索引』を刊行する。シリーズ完結後、二〇二六年に完結記念&京大退職記念シンポジウムを予定している。

* * * * *

少々苦しい言い訳をすれば、二〇二六年三月の定年退職に向けたイベントを前面に押し出しているもの、本来このプロジェクトは科学研究費基盤研究(B)二〇一五―一八年度「メディア出身議員」調査による新しいメディア政治史の構想」(代表者・佐藤卓)」、研究課題 15H02792) および同二〇二〇―二三年度「近代日本の政治エリート輩出における「メディア経験」の総合的研究」(代表者・佐藤卓)」、研究課題 20H04482)の研究成果の一部である。当然ながらこの科研プロジェクトにおいて最も古い時期と最も新しい時期の「メディア

議員」を執筆してもらったため、元ゼミナリスト以外からも気鋭の歴史学者、政治学者、教育社会学者に参加していただいている。

サバティカルの必要性を訴えているこの巻頭言を書きながらも、すでに私は自ら執筆する第一巻『池崎忠孝の明暗』に心を奪われている。この原稿を書くのは本当に楽しい。右の申請書には書いていないが、この仕事に続いて『言論統制』(中公新書) 刊行二〇周年の二〇二四年に向けて、改訂新版の準備を始める予定である。サバティカルは「休暇」になりそうにないので、やはり「研究専念期間」と訳しておきたい。